ミュージアム通信

Shu Ogawara

小川原脩記念美術館　倶知安風土館
☎ 21-4141　　☎ 22-6631

開館時間は 9 時～ 17 時
（入館は 16 時 30 分まで）

12 月の休館日
6 日、12 ～ 16 日※展示替え休館、20 日、27 日
31 日～ 1 月 4 日※年末年始休館

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原脩展　ある画家の軌跡」

20 ～ 80 歳代まで、その時々の小川原脩の視点を示す代表作により、70 年に及ぶ一人の画家の歩みを辿ります。

会期：開催中～ 12 月 11 日（日）

「小川原脩展　巓（てん）」

小川原脩は、その生涯にわたって山を描き続けました。戦前から繰り返し描かれてきたニセコ連峰、戦後に描かれた四季折々の羊蹄山、そして晩年に訪れた中国、チベット、インドの山々。日常空間の背景として、自然の美しさを体現するものとして、あるいは精神性のシンボルとして、山は常に小川原脩の傍にありました。本展では、代表作「巓（てん）」(1981 年作) を軸として、小川原脩の画業を辿ります。

会期： 12 月 17 日（土）～平成 29 年 4 月 16 日（日）

■企画展示

「杉山留美子展　光満ちるとき」

色彩・光の表現を追求した杉山留美子。「光の絵画」の世界をお楽しみください。

会期：開催中～ 12 月 11 日（日）

「版画の魅力　素描のたのしみ－武内コレクションより－」

当館は平成 18 年に故・武内一男氏より寄贈を受けた 103 点の多彩な絵画コレクションを有しており、そのコレクションには、小川原脩の作品をはじめとして、上野山清貢や北岡文雄、渡会純价など北海道の作家に加え、棟方志功、林武、梅原龍三郎など日本近代美術を代表する作家の版画・水彩・素描作品が数多く含まれています。本展では、油彩画とは趣が異なる、紙にのびやかに描かれた素描作品や版画作品を楽しんでいただきます。

会期： 12 月 17 日（土）～平成 29 年 2 月 5 日（日）

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン

「ミュージアム・シネマ『パリ PARIS』（フランス・2008 年・129 分）」

何気ない日常の中にある喜びを、やさしい視点で描いた珠玉の物語。歩いて、恋して、口論して、遅刻して・・・何という幸せ、気軽にパリで生きていけるなんて。

日時：12 月 10 日（土）14 時～ 16 時 15 分

お話し：柴　勤（当館館長）　会場：当館映像ルーム　聴講無料

風土館講座のお知らせ

「くっちゃんアーカイブをつくろう」 3 回目

各家庭に眠っている資料、散逸の危機にある歴史資料のコレクション、風土館に保存されたままの資料。これらを集め、関連づけて整理したのが「くっちゃんアーカイブ」です。まさに地域の歴史を跡づける貴重な共有財産で、皆さんのご家庭の歴史を示す写真や文書は、アーカイブ化することで倶知安の歴史を示す貴重な資料になります。アーカイブづくりには皆さんのご協力が不可欠です。ぜひご来聴ください。

日時：12 月 3 日（土）13 時～ 16 時 30 分

講師：新谷保人さん（京極町湧学館副館長）

聴講無料・展示見学を含む場合は一人 100 円

美術館から

昨年の「大同ギャラリー」に続き、この 12 月には「札幌時計台ギャラリー」が半世紀近い歴史に幕を下ろす。どちらも、道立近代美術館が開館する以前から、札幌の、ということは北海道の美術活動の中心をなす両雄であった。そして、美術を愛する実に多くの市民、道民に親しまれてきた。それは、志の高い作家にとっても同じことで、本格的な個展が開催できる貴重な場所であった。時計台ギャラリーの一番大きな展示室で、いつも変わることなく、ソファに深く腰掛け、パイプ片手に暖かく迎えてくれた小川原先生の姿が懐かしい。

館　長　柴　勤（しば つとむ）

クリスマス キッズコンサート

合唱、ハンドベルなど
子どもたちが聖夜に贈る楽しいひととき
日時：12 月 23 日（水・祝）
17 時 30 分～ 19 時 30 分
会場：当館第 1 展示室　料金：無料

感動の一点

『山鳩』

1987年　小川原　脩　画

空の青、雪山の白、そして大地の茶。タイトルのとおり山鳩が飛んでいるが、空を飛ぶのではなく、大地と同化している。白と茶の間には、鮮やかな朱色があり、大地の内側からの滲み出るようなエネルギーを思わせる。丘の上に木立がならぶ姿は、まるで、森から時折響いてくる音を拾い上げて音符にしたようだ。静寂とのバランスが心地よい、自然のリズムを刻んでいる。

このモチーフの始まりとなった作品「巓（てん）」は1981年に描かれた。巓とは山のてっぺん、頂きのことを指す。私たち倶知安に暮らす人間からすると、この山容は明らかにニセコアンヌプリだと受け止めると思う。しかし、画家本人は「どこの山かは関係がない」と語っている。ひと際白く輝く山頂は、小川原の精神の高さへの憧憬そのものであり、その頂点は山である必要はないのだ。この作品についても1987年、最初の「巓」から6年後に描かれているが、その間、時に山はチベットの寺院に姿を変え、この青と白と茶のコントラストは続いてゆく。良く似ているが、まったく同じものは一つとしてない。どこか変化をつけながら繰り返し描く。同じモチーフを最後に描いたのは1997年で、山鳩はキタギツネに姿を変え、より明るい色彩へと変化している。

文：沼田　絵美（小川原脩記念美術館　学芸員）

ふるさと探訪

405回

―フユシャク―

白い季節の到来。突然にやってきて、景色ばかりか我々の生活のあらゆる面を一変させる。これはもう独裁である。冬将軍とはよく言ったものだ。

冬将軍が支配を始める季節、まさか昆虫が活動しているとは想像すらできない方が多いのではないか。シャクガというガの中の大きなグループの中に、実際にこの季節にだけ成虫が出現する種がいる。発生する時期にちなんでフユシャクと呼ばれ、倶知安でも数種が確認されている。

▲交尾するフユシャクの１種
（flickr Photo Sharing より）

オスは大きなハネを持ち、小雪のちらつく夜などに街灯の周りを弱々しく飛ぶのをよく見るのだが、メスの姿を見ることはまずない。と言うのは、メスは飛ぶ能力をすっかり失っているためだ。そもそも、姿がとてもガとは思えない。ハネや胸が小さく退化し、腹部が逆に大きく膨らんでいる。6本の足は長く、英語ではスパイダーモス（クモに似たガ）と呼ばれている。

メスはあまり動かない。木の幹に静止していると、幹の色に溶け込んでしまう。外敵を防ぐためのカモフラージュである。そして一種のニオイ（フェロモンという）を放出してオスを呼ぶ。この仲間の成虫は口がない。だから成虫は、繁殖の行動や卵を生産に必要なすべてのエネルギーを幼虫時代に蓄えた栄養分でまかなう。メスは飛ぶためのエネルギーすら繁殖にふり向けているのだ。

でも、なぜ今時期に成虫が出現するのか。外敵が少ないからと説明されているが、そうなのだろうか。フユシャクで特に目立つのは、冬に成虫になることと、メスが飛ばないこと。これらは深い関係があるに違いない。

文：岡崎　毅（倶知安風土館館長）